

## 高越寺経塚における常滑焼広口壺の搬入の背景

大塩啓一郎<sup>1</sup>

[Keiichiro Oshio : The background of an imported Tokoname-ware wide-mouthed jar into the Kotsu-ji sutra mound.]

**摘要：**本報告では、徳島県立博物館が寄託を受けて保管している、高越寺経塚より出土し、外容器とされていた常滑焼広口壺について、資料化を行い、その搬入の背景について考察した。その結果、本資料を常滑焼広口壺の2型式（1150～1175年）と比定し、その搬入の背景として、高越寺経塚構築の前段階で、畿内の影響を受けて、常滑焼広口壺という器種が選択されて持ち込まれた可能性を指摘した。

**キーワード：**経塚、常滑焼、外容器、吉野川市

### はじめに

高越寺経塚は、徳島県吉野川市山川町木綿麻山に位置する経塚で、1977年（昭和52）に発見された。経塚からは、紙本経8点、銅経筒1点、常滑焼広口壺1点、陶製容器片、刀身片、土師器皿1点、銭貨が出土しており、12世紀後半の年代が与えられている（千葉，1978）（図1）。

高越寺経塚出土資料は、2018年に高越寺より徳島県立博物館に寄託され、紙本経、銅経筒、常滑焼広口壺を常設展示室にて展示している。

本稿では、高越寺経塚において、外容器として使用された常滑焼広口壺について、中世阿波の常滑焼の出土状況などを踏まえながら、搬入された背景への考察を行う。

### 1. 中世阿波の常滑焼

常滑焼は、愛知県常滑市を中心とした知多半島のほぼ全域において、平安時代末期（12世紀）に生産が開始された陶器である。中世の常滑窯では、甕や壺といった貯蔵具を中心に生産を行っていた（愛知県史編さん委員会，2012）。

中世陶器の貯蔵具は、阿波では備前焼が主体であるが（北野，2019）、沿岸部の遺跡を中心に、若干常滑焼の貯蔵具も出土している（図2）。中世阿波の遺跡より出土した常滑焼は13世紀後半～14世紀前半（5型式～7型式）にかけてのものが多く（表1）、器種としては甕がその大半を占めている。これは貯蔵具の甕において、常滑焼が独占する土佐でも同様であり、とくに県南部から土佐にかけては、



図1 高越寺経塚出土の常滑焼広口壺と銅経筒

常滑焼の定着と、13世紀よりみられる紀伊型土釜の搬入経路との関係性が指摘されている（池澤ほか，2022）。

### 2. 高越寺経塚出土の常滑焼広口壺

高越寺経塚出土の常滑焼広口壺は、推定口径23.1cm、最大径36.4cm、底径12.8cm、器高37.2cmを測り、ほぼ完形の状態で復元できる（図3）。口縁部から頸部にかけてすばまったのち、肩がやや強く張り出し、底部にかけて縮小していく形状をしている。器高が50cm以上の大型品である常滑焼甕と比較して小さく、中型品として評価できる。色調は、内面が灰色、外面が橙色とにぶい黄橙色を呈する。常滑焼の広口壺の2型式に比定され、生産年代は1150～

2025年12月5日受付，12月17日受理。

<sup>1</sup> 徳島県立博物館，〒770-8070 徳島市八万町文化の森総合公園。Tokushima Prefectural Museum, Bunka-no-Mori Park, Hachiman-chô, Tokushima 770-8070, Japan.



図2 高越寺経塚と中世阿波における常滑焼の出土遺跡

1. 大柿遺跡 2. 円通寺遺跡 3. 中庄東遺跡 4. 田上Ⅱ遺跡 5. 町口遺跡 6. 神宮寺遺跡 7. 黒谷川宮ノ前遺跡 8. 浄土寺遺跡  
9. 大松遺跡 10. 中島田遺跡 11. 川西遺跡 12. 寺山遺跡 13. 新居見遺跡 14. 加茂宮ノ前遺跡 15. 宮ノ本遺跡 16. 庄境遺跡

表1 中世阿波の遺跡より出土した常滑焼の型式

番号	遺跡名	型式												
		1a	1b	2	3	4	5	6a	6b	7	8	9	不明	
	高越寺経塚			1										
1	大柿遺跡						1	1						1
2	円通寺遺跡							1	4	1				20
3	中庄東遺跡						1							3
4	田上Ⅱ遺跡						1							
5	町口遺跡													3
6	神宮寺遺跡							1						3
7	黒谷川宮ノ前遺跡													1
8	浄土寺遺跡			1										
9	大松遺跡			1	2									
10	中島田遺跡							8	2	3	1			11
11	川西遺跡							1						2
12	寺山遺跡							1	2					
13	新居見遺跡													2
14	加茂宮ノ前遺跡									1				
15	宮ノ本遺跡	1												17
16	庄境遺跡										1			

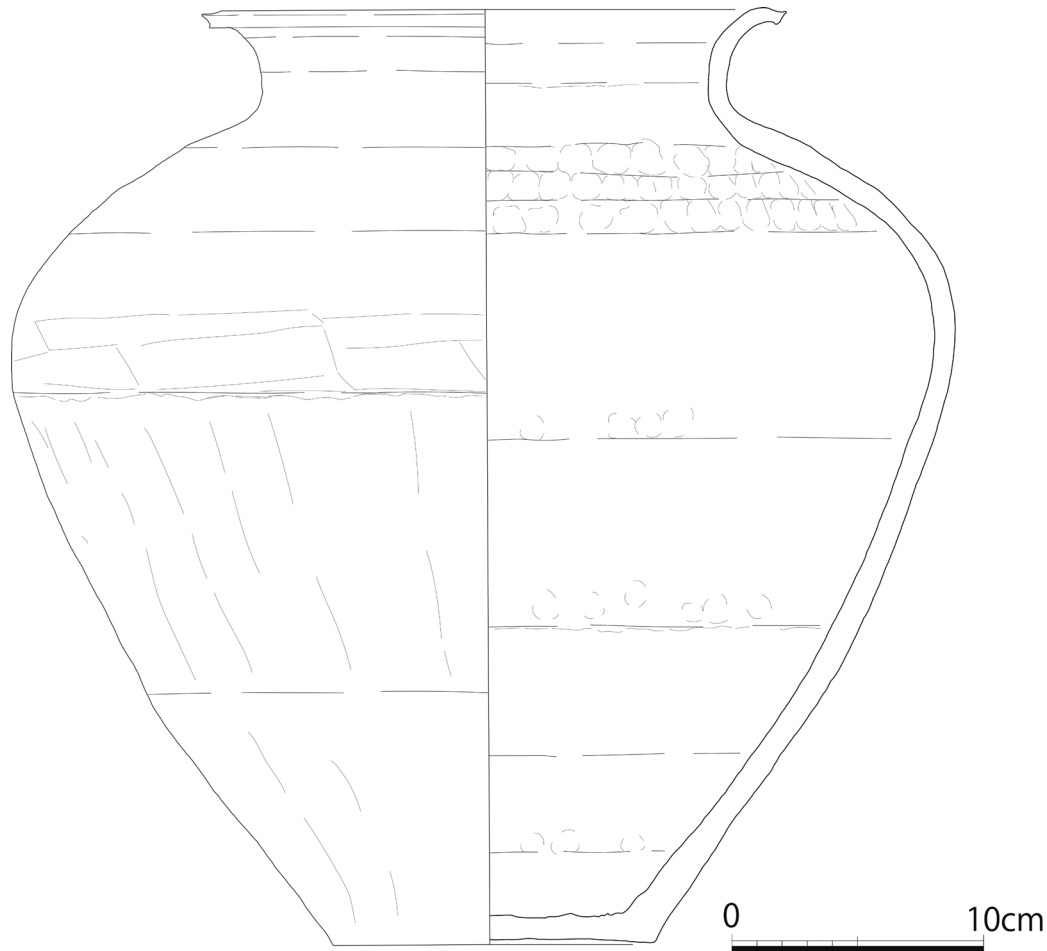


図3 高越寺経塚出土の常滑焼広口壺実測図

1175年が与えられる。

常滑焼の中型の壺や甕は、経塚容器や貯蔵容器、蔵骨器に主に使用され、とくに中型の壺は「経塚壺」と呼ぶ場合もある（赤羽，1984）。実際に常滑焼の生産体制で、経塚壺としてつくられたかについては不明であるが、本資料も外容器として埋納されていた。

これらのことから本資料が搬入された背景としては、搬入当初から経塚の外容器として使用することを意図があった、または貯蔵容器などとして持ち込んだものを転用した、という2通りのパターンが考えられる。

### 3. 高越寺経塚における常滑焼広口壺の搬入の背景

高越寺経塚出土の常滑焼広口壺は、管見の限り、中世阿波の遺跡における現状唯一の常滑焼の広口壺の出土例である（表2）。中世阿波の常滑焼が大型品の甕が主体であるのは、貯蔵容器として持ち込まれたものが多いことを示している。

2型式にあたる高越寺経塚出土の常滑焼広口壺は、5型式～7型式のものに比して1世紀程度先行しており、一般

的に阿波や土佐で常滑焼の流入が盛んになる時期よりも早い段階で持ち込まれたということになる。この時期は阿波において、常滑焼が多く流通している時期とはいえない。

これらのことから、本資料の搬入は偶発的なものではなく、何らかの意図を持って常滑焼広口壺を選択した結果であった可能性が指摘できる。

先述の通り、常滑焼の中型の壺は経塚容器として使用されている例が多い。畿内においては、山城（京都府南部）を中心に、東海系の外容器専用の円筒が多く用いられるほか、常滑焼の1b型式（1130～1150年）～2型式の壺・甕が一定数みられる（村木，1998）。

高越寺とその周辺は、経塚が形成された12世紀後半、尊勝寺（京都府）領高越寺荘の荘域であった。「山槐記」の永暦2（1161）年8月5日条に「前阿波守説方来示付高越寺解状」にみえる内容から、領家が阿波守説方の妻兼子であったことが判明している（沖野1962；藤野・田中1986；平凡社出版編，2000）。高越寺荘の成立の背景については、近年見直しが求められており（福家，2021）、時期に関しても尊勝寺創建当初である康和4（1102）年ごろ

表2 中世阿波における常滑焼の器種組成

番号	遺跡名	大型	中型	小型
		甗	広口壺	片口鉢
	高越寺経塚		1	
1	大柿遺跡	3		
2	円通寺遺跡	26		
3	中庄東遺跡	4		
4	田上遺跡Ⅱ	1		
5	町口遺跡	3		
6	神宮寺遺跡	4		
7	黒谷川宮ノ前遺跡	1		
8	浄土寺遺跡	1		
9	大松遺跡	1		3
10	中島田遺跡	25		
11	川西遺跡	3		
12	寺山遺跡	3		
13	新居見遺跡	2		
14	加茂宮ノ前遺跡	1		
15	宮ノ本遺跡	19		
16	庄境遺跡	1		

か、説方任在期の12世紀前半ごろと見解が割れている。いずれにせよ、常滑焼広口壺の2型式の生産年代である1150～1175年において、当地域と畿内に関係があったことを示す記述であるといえる。

これらのことより、中型品である常滑焼広口壺が選択された要因としては、畿内の経塚の影響を受けたことが考えられる。先述のとおり、常滑焼の中型品がほかに確認できないこと、常滑焼の搬入数が少なかった時期であることを踏まえると、先に経塚をつくる計画があり、その外容器として本資料が選択されて持ち込まれた可能性が高いと指摘できるだろう。

## おわりに

以上、高越寺経塚出土の常滑焼広口壺について、中世阿波の常滑焼の出土状況を踏まえながら、その搬入された背景について考察した。阿波における本資料の特殊性について示すことができたと考えられる。

阿波における常滑焼の流通についての考察については、今後の課題としたい。

## 謝辞

本稿を作成するにあたり、本研究の一部に、科学研究費補助金の研究活動スタート支援（課題番号24K22550）を使用させていただいた。

## 引用文献

- 愛知県史編さん委員会. 2012. 愛知県史 別編3 窯業3 中世・近世 常滑系. 803p. 愛知県, 愛知.
- 赤羽一郎. 1984. 常滑焼—中世窯の様相—, 考古学ライブラリー 23. 99p. ニューサイエンス社, 東京.
- 池澤俊幸・島田豊彰・首藤久士・長井博志. 2022. 第10章 四国, 第1部 地域論. 日本中世土器研究会編, 新版 概説 中世の土器・陶磁器, p. 125-138. 真陽社, 京都.
- 沖野舜二. 1962. 阿波国庄園考. 65p. 小宮山書店, 東京.
- 北野隆亮. 2019. 備前焼流通からみた紀伊水道内海世界. 中世都市研究会編, 港津と権力, p. 267-284. 山川出版社, 東京.
- 千葉幸伸. 1978. 四国の経塚—新資料紹介と若干の比較—. 瀬戸内海歴史民俗資料館年報 1978, 1-10.
- 福家清司. 2021. 阿波国高越寺荘をめぐる諸問題について. 徳島地方史研究会編, p. 3-20. 和泉書院, 大阪.
- 田中省造. 1986. 高越寺の歴史. 藤野真宥・田中省造編, 高越山, p. 19-73. 高越寺. 徳島.
- 平凡社地方資料センター編. 2000. 高越寺庄. 日本歴史地名大系, 37 徳島県の地名, p. 264-265. 平凡社, 東京.
- 中野晴久. 2022. 第1節 東海諸窯, 第5章 中世陶器, 第2部 土器陶磁器各論. 日本中世土器研究会編, 新版 概説 中世の土器・陶磁器, p. 231-248. 真陽社, 京都.
- 村木二郎. 1998. 近畿の経塚. 史林, 81 (2): 201-241.

## 図版出典

図1: 徳島県立博物館デジタルアーカイブより引用した。

図2: 平凡社地図出版の原図より、大塩が作成した。

図3: 大塩が実測し、作成した。

表1: 各遺跡の発掘調査報告書掲載の遺物図面・所見を参考に、愛知県史編さん委員会(2012)、中野(2022)の編年観を用いて作成した。「不明」以外で時期区分が曖昧なものは、推定される時期幅に合わせて表内のマスを結合させ、カウントを表記している。

表2: 各遺跡の発掘調査報告書掲載の遺物図面・所見を参考に、器種の分類は愛知県史編さん委員会(2012)、中野(2022)の分類に依拠して作成した。